LA 通信

第 649 回：【3・4 年生向け】卒論を書くために何かを読むということ（MS）

みなさんこんにちは。水曜日担当の MS です。今回は卒論の執筆を控えている 3 年生と、現在卒論の執筆をされている 4 年生の方向けに、卒論を書くために何かを読むときの方法についていくつかアドバイスできればと思います。

まず、卒論を書くために読むということを考える必要性についてお話しします。卒論を執筆する際は、様々な文献を読むことになります。したがって、自分以外の人間が書いたものを読み、その内容について考える必要が出てくるでしょう。同時に、それを受けて自分で内容を考えて書くということも必要になります。それを推敲する過程で、他人の意見を書いたものであれ、自分の意見を書いたものであれ、いずれにせよ自分が書いたものも読む機会が増えます。ご存じの通り、この一連のプロセスには時間がかかりますが、一度自分の読むスタイルを見つけておけば、それを効率的に遂行できます。つまるところ、何かを読み、それをもとに書くということに慣れておこうということです。これはみなさんが将来身に着けておくと便利なスキルでもあるでしょう。

もちろん、みなさん自身で読む方法や、自分はこのように読む、というスタイルを見つけられるのが望ましいことに変わりありません。ですが、かくいう私も、卒論を書き始めたときはそのことについて意識しておらず、あくまでゼミで卒論の指導を受けるなかで読み方について指導教員から教わり、自分で気づいていきました。いくつかみなさんと共有できればと思います。

一つ目は、突っ込みを入れながら読むということです。私の指導教員から教わったやり方ですが、実際やってみると便利なことに気づきました。文献をそのまま読んで理解するということではなく、読み手としてリアクションをしながら、批判的に読んでみるということだと理解しています。主に、論文の論理の立て方や議論の進め方を考えるうえで役立っています。たとえば、書き手の主張を書いている文があれば、自ずと「なんで?」と問いかけてみます。後続する行にその理由の説明があるのであれば「なるほど」となるし、もしなければ「なんでやねん」とリアクションします。他人の論文のみならず、自分の論文に対しても有効ですので、よければ試してみてください。

二つ目は、諦めずに読み返す習慣をつけることです。卒論を書く上で様々な文献を読みます。もしかすると、卒論のために文献を探して読んだが、内容が理解できなかったという経験をされた方がいらっしゃるかもしれません。私は何度もあります。ですが、文献を集めて読んでいくうちに、だんだんと自分の気になる分野で言われていることや、議論の前提となっているものについて知見を深めていくでしょう。その状態で、以前わからなかった文献を読んでみると、わかるようになっていたということがあり得るかもしれません。わからなかったからあきらめるのではなく、時間をおいてチャレンジしてみると、意外とうまくいくかもしれません。難しい文献に出会った人は試してみてください。それでは。